

## 外傷性脳損傷を持つ成人への介入が就業構造を向上させるかもしれない



自宅での訓練と就業支援は期待が持てるように思われるが、これらの介入は広く用いられていないようだ。

### 本レビューの目的

このキャンベル・システムティック・レビューでは、外傷性脳損傷を持つ成人が競争の激しい雇用を得るのを助けるための職業リハビリテーションによる介入の有効性を調査している。3つのランダム化比較試験が含まれている。アメリカ合衆国の軍人に関するものが2つと、中国（香港）における文民に関するものが2つである。

外傷性脳損傷に苦しんできた成人のためのプログラムが、就業構造を改善するかもしれない。全てのプログラムが就業に結びついたが、どのプログラムも他のプログラムと比べて有効ということにはなかった。

### 本レビューの研究対象

外傷性脳損傷（TBI）に苦しむ人々のアメリカ合衆国での失業率は、国内平均が7%であるのに比べて、2001年から2010年にかけて、60%前後であった。

回復期リハビリテーションサービス、例えば居住コミュニティへの再統合プログラム、包括的集中治療プログラム、コミュニティへの再加入プログラムなどは、個々人が進行中の損傷に適応して、自分のコミュニティ、職場、教育に再び戻ることを手助けすることに焦点を置いている。本レビューでは、TBIを抱えた個々人を職業復帰させるのに最も効果的な介入の種類を評価する。

### レビューの対象となる研究

対象となる研究は、TBIを抱える勤労世代の成人が、自営業を含む、競争の激しい雇用に復帰するのを手助けすることに焦点を当てた介入を評価することである。参加者の条件は、18歳から65歳の間で、非穿通性外傷のTBIを経験し、損傷を受けた時点でフルタイムあるいはパートタイムの職に就いていて、介入の時点で失業中あるいは傷病休暇を取っていたことである。当該研究は競争的な就労をもってアウトカムとする。

3つのランダム化比較試験（RCT）が分析に含まれ、2つの研究はアメリカ軍人を対象とし、1つは中国（香港）の一般市民を対象としている。3つ全ての研究は、別のプログラムとの比較を行っている。1つは、病院におけるプログラムと家庭におけるプログラムを比較している。

2つめの研究は、CogSMARTプログラムに就労支援を加えたものと、就労支援単体を比較している。そして3つめの研究では、心理的および教育的な訓練を受けた統制群と、仮想現実での訓練プラットフォームを通じて同内容のものを受けた治療群を比較している。



### 本レビューの最新度

調査は2015年に終了した。このキャンベル・システマティック・レビューは2016年7月に発表された。

### キャンベル・コラボレーションとは

キャンベル・コラボレーションは、体系的なレビューを発表する、ボランティアによる非営利の国際研究組織である。我々は、社会科学と行動科学におけるプログラムに関するエビデンスを要約し、質を評価している、我々の目的は、人々がよりよい選択と政策決定を行うことを支援することである。

### このサマリーについて

このサマリーは、Howard White（キャンベル・コラボレーション）により執筆された。このPLSは『キャンベル・システマティック・レビュー』2016年6号に掲載されたCarolyn W. Graham, Michael D. West, Jessica L. Bourdon, Katherine J. Inge and Hannah E. Seward「外傷性脳損傷（TBI）を経験し労働している勤労世代の成人における職業復帰のための雇用介入」の基づいている（DOI:10.4073/csr.2016.6）。Anne Mellbye（RBUP、ノルウェー）がこのサマリーを構想し、Tanya Kristiansen（キャンベル・コラボレーション）より編集、作成された。

### 本プログラムの有効性

就業アウトカムを向上させるという点で、比較対象のプログラムよりも優れていたものはなかった。病院における集中的なプログラムは家庭におけるものと同程度であったし、CogSMARTは就業支援単体に価値を付加することがなかったし、仮想現実の訓練は心理的・教育的な訓練と変わらなかった。介入の前後での比較によると、アメリカにおける介入は就業構造を改善した。中国における介入は就業構造を改善しなかった。

労働時間や得た賃金といった雇用に関する副次的評価項目を報告した研究はなかった。

対象となる研究の数が少なかったため、異なる種類のプログラムの効果比率の分析を行うことはできなかった。

### 政策立案者と政策決定者に対する本レビューによる示唆

3つの研究は、実践と政策への示唆に限界がある。介入しないことが、他の介入よりも効果的であると分かった。そのうち2つの研究では、母集団が軍事関係者に限られていて、彼らは心的外傷後ストレス障害など、大きく異なった困難を症状として示していた。

家庭における訓練や就業支援の比較対象としての介入は期待できそうだった。

### 本レビューの研究上の示唆

TBIを抱える成人への職業復帰介入に関するランダム化比較試験の必要性があるし、できれば競争的な雇用と学校の出席を区別することが望ましい。軍人への介入は、アメリカ国外の母集団も含め、民間人における有効性を判断するために、民間人のサンプルを加えて行うべきである。より広い範囲の就業アウトカムを研究し、標準的な間隔を空けて定期的な追跡調査を行うべきである。